

今は昔、父母、主もなく、妻も子もなく、只一人ある青侍ありけり。すべき方もなかりければ、「観音たすけ給へ」とて長谷に参りて、御前にうつぶし伏て申けるやう、「此世にかくてあるべくは、やがてこの御前にて干死に死なん。もしまた、おのづからなる便もあるべくは、そのよしの夢を見ざらんかぎりは出づまじ」とて、うつぶし臥したりけるを、寺の僧見て「こは、いかなる者の、かくては候ふぞ。物食ふ所も見えず。かくうつぶし臥したれば、寺のため、けがらひ出でて、大事になりなん。誰を師にはしたるぞ。いづくにてか物は食ふ」など問ひければ「かくたよりなき物は、師もいかでか侍らん。物たまはる所もなく、あはれと申す人もなければ、仏の賜はん物を食べて、仏を師とたのみ奉りて候ふなり」とこたへければ、寺の僧ども集まりて「此事、いと不便の事也。寺のために悪しかりなん。観音をかこち申人にこそあんなれ。これ集まりて、養ひてさぶらはせん」とてかはるがはる物を食はせければ、もてくる物を食ひつつ、御前を立去らず候ひける程に、三七日になりけり。

三七日はてて、明けんとする夜の夢に、御帳より人の出でて「このをのこ、前世の罪のむくひをば知らで、観音をかこち申して、かくて候ふ事、いとあやしき事也。さはあれども、申す事のいとほしければ、いささかの事、はからひ給はりぬ。まず、すみやかにまかり出でよ。まかり出でんに、なににてああれ、手にあたらん物を取て、捨てずして持ちたれ。とくとくまかり出でよ」と追はるるを見て、はい起きて、約束の僧のがりゆきて、物うち食ひてまかり出でける程に、大門にてけつまづきて、うつぶしに倒れにけり。

起きあがりたるに、あるにもあらず、手ににぎられたる物を見れば、薬すべといふ物をただ一筋にぎられたり。「仏の賜ふ物にてあるにやあらん」と、いとほかなく思へども「仏のはからせ給やうあらん」と思ひて、これを手まさぐりにしつづ行く程に、虻一つ、ぶめきて、かほのめぐりに有るを、うるさければ、木の枝を折りて払ひ捨つれども、なほただ同じやうに、うるさくぶめきければ、とらへて腰をこの薬すぢにてひきくくりて、枝のさきにつけて持ちたりければ、腰をくくられて、ほかへはえ行かたで、ぶめき飛まはりけるを、長谷にまいりける女車の、前の簾をうちかづきてゐたる児の、いとうつくしげなるが「あの男の持ちたる物はなにぞ。かれ乞ひて、我に賜へ」と、馬に乗りてともにある侍にいひければ、その侍「その持ちたる物、若公の召すに参らせよ」といひければ、「仏の賜ひたる物に候へど、かく仰せ事候へば、参らせて候はん」とて、とらせたりければ、「この男、いとあはれなる男也。若公の召す物を、やすく参らせたる事」といひて、大柑子を、「これ、喉かわくらん、食へよ」とて、三つ、いとかうばしき陸奥国紙に包みてとらせたりければ、侍、とりつたへて取らず。

「薬一筋が、大柑子三つになりぬる事」と思ひて、木の枝にゆひ付けて、肩にうちてかけて行くほどに、「ゆるある人の忍びてまいるよ」と見えて、侍などあまた具して、かちよりまいる女房の、歩み困じて、ただたりにたりゐたるが「喉のかはけば、水飲ませよ」とて、消え入るやうにすれば、ともの人、手まどひをして、「近く水やある」と走り騒ぎもとむれど、水もなし。「こはいかゞせんずる。御旅籠馬にや、もしある」と問へど、はるかにおくれたりとして見ず。ほとほとしきさまに見ゆれば、まことにさはぎまどひて、しあつかふを見て、「喉かはきてさはぐ人よ」と見ければ、やはら歩み寄りたるに、「ここのなる男こそ、水のあり所は知りたるらめ。この辺り近く、水の清き所

やある」と問ひければ、「此四五町がうちには清き水候はじ。いかなる事の候ふにか」と問ひければ、「歩み困せさせ給ひて、御喉のかはかせ給ひて、水ほしがらせ給ふに、水のなきが大事なれば、たづぬるぞ」といひければ「不便に候ふ御事かな。水の所は遠くて、汲みて参らば、程経候ひなん。これはいかが」とて、つゝみたる柑子を、三ながらとらせたりければ、悦びさはぎて食せられたれば、それを食ひて、やうやう目を見あげて、「こは、いかなりつる事ぞ」といふ。

「御喉かかせ給て、水飲ませよとおほせられつるままに、御殿籠り入らせ給ひつれば、水もとめ候つれども、清き水も候はざりつるに、ここに候ふ男の、思ひかけずその心を得て、この柑子を三つ、奉りたりつれば、参らせたるなり」といふに、此女房、「我はさは、喉かはきて、絶入たりけるにこそ有けれ。「水飲ませよ」といひつるばかりはおほゆれど、其後の事は露おほえず。此柑子得さらましかば、この野中にて消え入りなまし。うれしかりける男かな。この男、いまだあるか」と問へば、「かしこに候ふ」と申す。「その男、しばしあれといへ。いみじからん事ありとも、絶え入はてなば、かひなくてこそやみなまし。男のうれしと思ふばかりの事は、かゝる旅にては、いかがせんずるぞ。食ひ物は持ちて来たるか。食はせてやれ」といへば、「あの男、しばし候へ。御旅籠馬など参りたらんに、物など食ひてまかれ」といへば、「うけたまはりぬ」とて、ゐたるほどに、旅籠馬、皮籠馬など来着きたり。「など、かくはるかにをくれては参るぞ。御旅籠馬などは、つねにさきだつこそよけれ。とみの事などもあるに、かく遅るるはよき事かは」などいひて、やがて幔引き、畳など敷きて、「水遠かなれど、困せさせ給たれば、召し物は、こゝにて参らすべき也」とて、夫どもやりなどして、水汲ませ、食物しいだしたれば、此男に清げにして食はせたり。物を食ふ食ふ「ありつる柑子、なにかならんずらん。観音はからはせ給ふ事なれば、よもむなしくはやまじ」と思ひみたる程に、白くよき布を三疋取り出でて「これ、あの男に取らせよ。この柑子の喜びは、いひつくすべき方もなけれども、かかる旅の道にては、うれしと思ふばかりの事はいかせん。これはただ、心ざしのはじめを、見するなり。京のおはしまし所は、そこそこになん。必ず参れ。この柑子の喜びをばせんずるぞ」といひて、布三疋取らせられたれば、悦びて布を取りて、「藁筋一筋が、布三匹になりぬる事」と思ひて、腋にはさみてまかる程に其日は暮れにけり。

道づらなる人の家にとどまりて、明けぬれば鳥とともに起きて行く程に、日さしあがりて辰の時ばかりに、えもいはず良き馬に乗りたる人、此馬を愛しつつ、道も行きやらず、ふるまはするほどに、「まごごとにはぬ馬かな。これをぞ千貫がけなどはいふにやあらん」と見るほどに、此馬にはかに倒れて、ただ死にに死ぬれば、主、我にもあらぬけしきにて、下りて立ちあたり。手まどひして、従者どもも、鞍下ろしなどして、「いかがせんずる」といへども、かひなく死にはてぬれば、手を打ち、あさましがり、泣きぬばかりに思ひたれど、すべき方なくて、あやしの馬のあるに乗りぬ。

「かくてここにありとも、すべきやうなし。我等は去なん。これ、ともかくもして引き隠せ」とて、下種男を一人とどめて、去ぬれば、この男見て、「此馬、わが馬にならんとて死ぬるにこそあらぬめ。藁一筋柑子三になりぬ。柑子三が布三匹になりたり。此布、馬になるべきなめり」と思ひて、歩み寄りて、この下種男にいふやう、「こは、いかなりつる馬ぞ」と問ひければ、「睦奥国より得させ給へる馬なり。よろづの人のほしがりて、あたかも限らず買はんと申しつるをも惜しみて、放ち給はずして、今日かく死ぬれば、そのあたひ少分をもとらせ給はずなりぬ。おのれも、皮をだに剥がばやと思へど、旅にてはいかがすべきと思ひて、まもり立ちて侍なり」といひければ、「その

事なり。いみじき御馬かなと見侍りつるに、はかなくかく死ぬる事、命ある物はあさましき事なり。まことに、旅にては、皮はぎ給ひたりとも、え干し給はじ。おのれはこの辺に侍れば、皮はぎてつかひ侍らん。得させておはしね」とて、此布を一匹とらせれば、男、思はずなる所得したりと思ひて、思ひもぞかへすとや思ふらん、布をとるままに、見だにも返へらず走り去りぬ。

男、よくやりはてて後、手かきあらひて、長谷の御方のむかひて、「此馬、生けて給はらん」と念じたる程に、この馬、目を見あくるままに、頭をもたげて、起きんとしければ、やはら手をかけて起こしぬ。うれしき事限なし。」をくれて来る人もぞある。また、ありつる男もぞ来る」など、あやうくおほえければ、やうやう隠れの方に引き入りて、時移るまでやすめて、もとのやうに心地もなりにければ、人のもとに引もて行て、その布一匹して、轡くつわやあやしの鞍くらにかへて馬乗りぬ。

京さまに上る程に、宇治わたりにて日暮れにければ、その夜は人のもとにとまりて、今一疋の布して、馬の草、わが食物などにかへて、その夜はとまりて、つとめていととく、京さまにのほりければ、九条わたりなる人の家に、物へ行かんずるやうにて、立きはぐ所あり。「此馬、京に率て行きたらんに、見知りたる人ありて、盗みたるかなどいはれんもよしなし。やはら、これを売ればや」と思ひて「かやうの所に、馬など用なる物ぞかし」とて下り立ちて、寄りて「もし馬などや買はせ給ふ」と問ひければ、馬がなと思けるほどにて、此馬を見て、「いかがせん」とさはぎて、「只今、かはり絹などはなきを、この鳥羽の田や米などにはかへてんや」といひければ、「中々、絹よりは第一の事也」と思て、「絹や銭などこそ用には侍れ。おのれは旅なれば、田ならば何にかはせんとずると思ひ給ふれど、馬の御用あるべくは、ただ仰せにこそしたがはめ」といへば、此馬に乗り試み、馳せなどして、「ただ、思ひつるさまなり」といひて、此鳥羽の近き田三町、稲すこし、米などとらせて、やがてこの家をあつけて、「おのれ、もし命ありて帰りのほりたらば、その時、返し得させ給へ。のぼらざらんかぎりは、かくて居給へれ。もし又、命たえて、亡くもなりなば、やがてわが家にして居給へ。子も侍らねば、とかく申す人もよも侍らじ」といひて、あづけて、やがて下りにければ、その家に入り居て、見たりける。米、稲など取りをきて、ただひとりなりけれど、食物ありければ、かたはら、そのへんなりける下種などいできて、つかはれなどして、ただありつきに、居つきにけり。

二月ばかりの事なりければ、その得たりける田を、半らは人に作らせ、今半らは我料に作らせたりけるが、人の方のもよけれども、それは世の常にて、おのれが分とて作りたるは、ことのほか多くいできたければ、稲おほく刈り置きて、それよりうちはじめ、風の吹きつくるやうに徳つきて、いみじき徳人にてぞありける。その家あるじも、音せずなりにければ、其家も我物にして、子孫などいできて、ことのほかに栄へたりけるとか。